

Gemini 3.1 Pro リリース分析

— 知的財産業務への影響と戦略的示唆 —

Claude Opus 4.6

2026年2月21日作成

エグゼクティブサマリー

Googleは2026年2月19日、Gemini 3.1 Proをリリースしました。前世代のGemini 3 Proと比較して推論性能が2倍以上向上し、Artificial Analysis Intelligence Indexで総合第1位を獲得しました。価格はClaude Opus 4.6やGPT-5.2の約半額です。

しかし、知財業務への影響は一様ではありません。日本の特許専門家による実践テストでは、特許明細書の起草において出力が短く「期待外れ」という評価でした。一方で、1Mトークンのコンテキストウィンドウと低コストを活かした特許ランドスケープ分析や先行技術調査では大きな可能性があります。本レポートでは、具体的な機能向上点、知財業務への影響、そして企業知財部門への戦略的提言をまとめます。

1. Gemini 3.1 Pro の主要進化ポイント

1.1 3段階思考システム（最大の革新）

Gemini 3.1 Proの最も重要な革新は、Low・Medium・Highの3段階に調整可能な思考システムです。前世代のGemini 3 ProはLowとHighの2段階のみでした。新しいMediumモードは旧Highモード相当の性能を提供し、新HighモードはGoogleが「Gemini Deep Thinkのミニ版」と呼ぶ深い推論が可能です。

知財業務での活用例：

- Low：大量の特許文献の分類・スクリーニング（コスト最小化）
- Medium：クレーム解釈、先行技術の関連性分析
- High：特許性判断、無効化論拠の構築など複雑な推論タスク

1.2 主要ベンチマーク比較

ベンチマーク	Gemini 3.1	Gemini 3 Pro	Claude Opus	向上率
--------	------------	--------------	-------------	-----

	Pro		4.6	
ARC-AGI-2 (論理推論)	77.1%	31.1%	68.8%	+148%
GPQA Diamond (科学)	94.3%	84.0%	84.2%	+12%
MMMLU (多言語知識)	92.6%	85.8%	89.0%	+8%
LiveCodeBench Elo	2,887	2,439	2,724	+18%
GDPval-AA (企業法務)	1,317	N/A	1,606	—
APEX-Agents (エージェント)	33.5%	18.4%	N/A	+82%

※ GDPval-AA は法務を含む企業実務タスクのベンチマーク。知財業務と最も相関が高い。

1.3 技術仕様の比較

項目	Gemini 3.1 Pro	Gemini 3 Pro
コンテキストウィンドウ	100万トークン	100万トークン
最大出力	64,000 トークン	64,000 トークン
思考レベル	3段階 (Low/Med/High)	2段階 (Low/High)
マルチモーダル	テキスト/画像/音声/動画/PDF	同左
API 価格 (入力/出力 per 1M)	\$2.00 / \$12.00	\$2.00 / \$12.00
ステータス	プレビュー	GA (一般提供)

2. Gemini 3 Pro ではできなかったこと

2.1 複雑な多段階推論の実用化

ARC-AGI-2 スコアが 31.1%から 77.1%へと飛躍的に向上したことは、未知の論理パターンに対する推論能力が根本的に強化されたことを示します。知財業務では、以下のような「複数の条件を同時に考慮する推論」が実用レベルに近づきます。

- 特許クレームの複数の構成要件を先行技術と照合し、新規性・進歩性を多角的に評価
- 特許無効化の論拠構築（複数の引用文献の組み合わせによる自明性の論証）
- 技術分野横断的なパテントランドスケープ分析での技術トレンド識別

2.2 エージェント性能の大幅向上

APEX-Agents スコアが 18.4%から 33.5%へ約 82%向上し、MCP Atlas（ツール連携）も 54.1%から 69.2%に改善されました。これにより、単一の質問応答ではなく、複数のツールやデータベースを自律的に操作する「AI エージェント」としての活用が現実味を帯びます。

具体的には、特許データベースへの検索クエリ生成→結果の取得・分析→レポート作成といった一連のワークフローを自動化する「特許調査エージェント」の構築が、Gemini 3 Pro より格段に実現可能性が高まりました。

2.3 科学技術分野の理解深化

GPQA Diamond（大学院レベルの科学問題）が 84.0%から 94.3%へ向上。これは特に化学・バイオ・材料科学などの専門性の高い特許分析での技術理解力向上を意味します。医薬品特許や先端材料の特許ランドスケープ分析において、技術的ニュアンスの把握精度が大きく改善されたと考えられます。

2.4 コストパフォーマンスの大幅改善

Artificial Analysis Intelligence Index で総合第 1 位（57 ポイント）を獲得しながら、価格は Claude Opus 4.6 や GPT-5.2 の約半額です。大量の特許文献を処理するランドスケープ分析やポートフォリオ分析では、このコスト優位性が大きな意味を持ちます。

3. 知財業務別の影響分析

業務領域	Gemini 3.1 Pro の適性	強み	課題
特許ランドスケープ分析	★★★★★ 最適	1M トークン、低コスト、高推論力	—

先行技術調査	★★★★☆ 有効	科学理解力、マルチモーダル	レイテンシの高さ
ポートフォリオ分析	★★★★☆ 有効	大量文書処理、コスト効率	法的推論は劣後
クレーム解釈・分析	★★★☆☆ 中程度	推論力向上	GDPval-AA で劇後
特許明細書起草	★★☆☆☆ 不向き	構造的正確性	出力が短い、網羅性不足
特許性判断・無効化分析	★★★☆☆ 中程度	High モードの深い推論	法的判断の信頼性

4. 日本の特許専門家による実践テスト結果

知財デザイン社の川上成年氏が、同一の発明開示書（吸収性物品）と同一の起草テンプレートを使用して、Gemini 3.1 Pro による特許明細書の起草をテストしました。

評価結果：

- 構造的には正確：クレーム、先行技術引用、段落番号が適切に生成された
- 死活問題：出力テキストが競合モデルと比較して著しく短かった
- 総合評価：「正直期待外れ」。特許明細書には「Claude Opus 4.6 を使った方が良い」と結論

この結果は、Gemini モデルが長文出力を制限する設計になっている可能性を示唆しています。特許明細書は網羅的かつ詳細な記載が求められるため、この制約は知財業務にとって重大な課題です。なお、Box Japan の独立評価では法務タスクの精度が 17 ポイント向上（57%→74%）しており、「分析」と「起草」では適性が大きく異なる点に注意が必要です。

5. 企業知財部門への戦略的提言

5.1 マルチモデル戦略の採用

現時点で、単一の AI モデルで全ての知財業務をカバーすることは非現実的です。業務別に最適なモデルを使い分ける「マルチモデル戦略」を推奨します。

業務	推奨モデル	理由
特許ランドスケープ分析、大量分類	Gemini 3.1 Pro	1M トークン×低コスト
特許明細書起草、長文起草	Claude Opus 4.6	詳細な長文出力、法的推論力
クレーム解釈、特許性判断	Claude Opus 4.6 または専用ツール	GDPval-AA の優位性
コード生成、ツール開発	Gemini 3.1 Pro / Claude	コーディング性能の大幅向上

5.2 導入時の注意点

- プレビュー状態であること**：現時点では GA（一般提供）前であり、レイテンシ（応答開始まで平均約 32 秒）が高く、本番環境での利用には注意が必要です。
- 出力長の制約**：日本の実践テストが示すように、特許明細書のような長文起草では出力が不足する可能性があります。GA 版での改善を確認する必要があります。
- ベンチマークと実務の乖離**：ベンチマークスコアの高さがそのまま知財業務での優秀性を保証するわけではありません。自社の業務フローでの検証が不可欠です。
- 専用ツールとの併用**：DeepIP、XLSCOUT、Patlytics 等の特許専用 AI ツールは、特許固有のトレーニングや RAG を備えており、汎用モデル単体では代替できません。Gemini 3.1 Pro はこれらツールの補完的役割として位置づけるのが適切です。

5.3 今後の展望

現在の AI 競争のサイクルは数週間単位で変動しており、Gemini 3.1 Pro の優位性も長くは続かない可能性があります。重要なのは、特定のモデルに依存するのではなく、マルチモデルを柔軟に切り替えられる体制を構築することです。また、Harvey AI が Gemini 3.1 Pro の GA 版での統合を準備中であり、法務・IP 分野専用ツールへの組み込みも進んでいます。

まとめ

Gemini 3.1 Pro は、推論能力とコストパフォーマンスの両面で画期的な進化を達成しました。知財業務への影響を一言でまとめると、

「分析」には Gemini 3.1 Pro、「起草」には Claude Opus 4.6

という使い分けが現時点での最適解です。企業知財部門は、特定モデルへのロックインを避け、業務別に最適なモデルを柔軟に選択できる体制を構築することが、AI時代の知財戦略の鍵となります。

主要参照ソース

- Google Blog: Gemini 3.1 Pro 公式発表 (2026/2/19)
- Google DeepMind: Gemini 3.1 Pro Model Card
- VentureBeat: First impressions – Deep Think Mini (2026/2/19)
- Artificial Analysis: Intelligence Index v4.0
- Box Japan: Gemini 3.1 Pro エンタープライズ評価
- 川上成年 (Note.com): Gemini 3.1 Pro を使った特許明細書テスト
- SmartScope: Benchmark Analysis 2026
- Harvey AI: Gemini 3 Pro Early Access Evaluation